

【東京】母校の教授職では惜敗、2020年に晴れて日大教授に就任-奥田貴久・日本大学医学部社会医学系法医学分野教授に聞く◆Vol.1

形成外科医として10年間の臨床経験を経て法医学の道へ

2025年12月1日(月)配信 m3.com地域版

2020年、日本大学医学部（板橋区）社会医学系法医学分野の第3代教授に就任した奥田貴久氏。形成外科医として10年間の臨床経験を積んだのち、2011年に法医学へと転じた経歴を持つ。臨床出身の法医学者として教授職に至るまでの経緯をはじめ、法医学教室の特色や運営体制、伝統的に取り組むアルコール医学やDNA鑑定の研究、さらに後進の育成に向けた展望について話を聞いた。（2025年10月6日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



奥田貴久氏

伝統ある法医学教室で、念願の教授就任を実現

——日本大学医学部社会医学系法医学分野の特色について教えてください。

1951年に開設された伝統ある法医学教室で、日本のDNA型鑑定の第一人者として知られる押田茂實先生や、『死体は語る』の著者である上野正彦先生など、異彩を放つ法医学者を多数輩出してきました。法医解剖はもちろん、突然死の病態生理、アルコール代謝酵素と臓器障害、ナノポアシークエンサーを用いた個人識別などの研究にも力を入れています。2024年には日本法医学会より「法医認定施設A」に認定され、教育・研究・実務の体制もより充実しました。

——奥田先生が教授に就任した経緯を教えてください。

私はもともと形成外科医として約10年間、臨床に携わっていましたが、2011年に法医学へとキャリアを転じました。アメリカ留学を経て、2015年に出身校である日本医科大学の法医学教室に着任しました。法医学をやるからには教授を目指そうと最初から心に決めており、2019年の教授選に向けて法医解剖や研究に励みました。研究成果が評価され、日本学術振興会から研究予算を獲得する機会にも恵まれましたが、教授選では惜しくも力及ばず、悔しい思いをしました。

その後、日本医科大学時代から法医解剖室をお借りするなどご縁のあった日本大学医学部の法医学教室へ移りました。2020年に本学でも教授選が行われ、私が任命されました。選考理由などの詳細は分かりませんが、今回は臨床と法医の両分野を経験してきたキャリアの多様性を評価していただけたのではないかと感じています。

——人員体制や解剖実績はどのようになっていますか。

当教室では、埼玉県内の法医解剖を他大学と分担して担当しています。ここ5年ほどの解剖件数は年間70~100件で推移しており、2024年は72件を実施しました。体制としては、私を含む医師2人に加え、薬物分析やDNA解析、病理切片の作成などを担う医師以外のスタッフ4人で構成されています。解剖は、医師1人、解剖補助1人、書記1人の3人体制でローテーションを組んで行っています。私はマネジメントや研究、教育など解剖以外の業務も多く、担当割合はおおよそ2対3で、もう1人の医師に多めに解剖を担当してもらっています。

DNA鑑定とアルコール脱水素酵素の研究にも注力

——日本大学医学部社会医学系法医学分野では、研究にも力を入れているとのことですが、今後取り組んでみたい研究テーマはありますか。

大きく2つあり、DNAとアルコールに関する研究です。DNAの研究には本学に着任してから取り組み始めました。当教室にはDNA研究の伝統があり、その流れを受けて自分も挑戦してみようと思ったのがきっかけです。DNA鑑定の方法としては、DNAの塩基配列を高速で読み取る次世代シーケンサー（NGS：Next-Generation Sequencer）が広まりつつありますが、装置が高額で、操作にも専門的な知識が必要という課題があります。そこで近年、NGSに比べて安価で導入しやすいとして注目されているのが、第3世代シーケンサー（TGS：Third Generation Sequencer）です。

TGSによるDNA解析は、NGSよりも長い塩基配列をリアルタイムで読み取れることに加え、メチル化といったエピジェネティクス情報も同時に解析できるのが特徴です。標準化はまだこれから段階ですが、私はこのTGSを用いた新しいDNA鑑定法の確立を目指して研究を進めています。TGSによる解析では、より高精度な個人特定が可能になるだけでなく、生前の生活習慣を推定できる可能性もあり、幅広い応用も期待されています。

例えば、歴史上の人物の骨などから、その人の没年齢や、生前に酒やタバコを嗜んでいたかといった情報を読み取ることが、理論上では可能になります。すでに臨床現場の一部では、がん遺伝子診断や腫瘍解析などでTGSの応用が始まっていますが、法医学の現場でもこの技術を生かしていきたいと考えています。

もう一つはアルコールに関する研究です。アルコールを分解するアルコール脱水素酵素（ADH）は肝臓だけでなく全身にも存在しますが、その全身のADHも代謝に関与しているのではないかとというのが私の仮説です。その働きが、肝障害や膵炎、脳萎縮などアルコール関連疾患の発症にどう関わるのかを探っています。

「定年までに教授を10人輩出することが目標」

——後進の育成について取り組んでみたいことはありますか。

法医学に関心を持ちながらも、研修先の選択やキャリア形成のプロセスに迷っている方も少なくないと思います。法医学はそもそも全国的にポストが少ないのですが、キャリア継続の前提として研究業績の積み重ねが重要です。ですから、魅力ある研究テーマがあり、十分に研究費が確保されている教室を選ぶことがとても重要です。その点で、当教室は恵まれた環境にあると思います。私自身がトップとして運営しているので、無用な上下関係や理不尽な指導とは無縁です。

今後は、私の定年までの15年ほどの間に、当教室から法医学の教授を10人輩出することを目標にしています。多くの若手が集まり、確実に研究を重ね、豊富な法医学の症例に触れながら、次世代を育てていける教室にしていきたいと考えています。

◆奥田 貴久（おくだ・たかひさ）氏

2001年日本医科大学卒業、同大形成外科学教室に入局。2005年に大学院医学研究科に進学、2011年同大形成外科学助教・講師、トーマス野口氏と出会ったことが転機となり、法医学の道に進む。2013年メリーランド大学医学部法医病理学へ留学し、米国法医制度の下で解剖、現場検証の研さんを積む。2015年日本医科大学法医学講師、2017年同准教授を経て、2020年より現職。

【取材・文＝久保 圭】（写真は本人提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

